

倫理的都市論とコミュニティ経済論

——惑星の都市化への処方箋——

杉山 武志
社会環境部門

Ethical Cities Theory and Community Economy Theory -Prescriptions for Curbing Planetary Urbanization-

Takeshi SUGIYAMA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: As climate change and the Covid-19 pandemic intersect, the future direction of capitalism is being debated because of fears about where it is headed. Under this global trend, planetary urbanization theory has received increased attention in the fields of human geography and urban sociology. The author of this paper, in considering prescriptions for curbing planetary urbanization, researched methods for invigorating ethical approaches in spatial practices. In particular, this paper discusses from a theoretical perspective how ethical cities theory and community economy theory will serve as vital perspectives in the sublation of spatial practices for the purpose of confronting planetary urbanization.

Keywords: planetary urbanization, the right to the city, ethical cities, community economy

1. はじめに：問題の所在

気候変動やコロナパンデミックも交差した世界的な潮流として、資本主義をめぐる政治経済学的な文脈でのパラダイム転換を求める声が大きくなっている。特に、道徳や倫理といった価値観が急速に論じられるようになってきている。たとえば、経済学者の岩井克人がカントに着目しながら問題提起した「資本主義と倫理」(岩井 2019)、ドイツの哲学者マルクス・ガブリエルによる倫理資本主義などがすぐさま想起される。ガブリエルの着想は、国家へ回帰するグローバル資本主義へのアンチテーゼとして倫理資本主義が披露されている(ガブリエル 2020, pp.128-137)。経済思想家のセルジュ・ラトゥーシュによる脱成長のためのローカル経済の発見(ラトゥーシュ 2019=2020)、経済思想家の斎藤幸平による「人新世の資本論」(斎藤 2020)、社会学者の大澤真幸などが掲げる「脱成長コミュニズム」(大澤 2021)といった着想もコロナパンデミックのもと増えてきている。

経済地理学者の中澤高志も指摘するように、「脱資本主義」や「ポスト資本主義」に関する書籍が次々と登場していることから判断して、現代資本主義あるいは人類がどこに向かうかはわからないとしても曲がり角にあるという感覚は、相当程度共有されている(中澤 2019, p.26)。その背景には、巨大テック企業 GAF A の席卷、急激なオンライン化に伴う監視資本主義への危惧、気候変動、経済的不平等や格差の進行がある(ガブリエル 2020; 斎藤 2020; 大澤 2021)。筆者としては、「成長か脱成長か」という二分法的論争には慎重を期する必要があると捉えている。しかし、資本主義のゆくえを危惧しながら、都市研究が惑星レベルの課題解決のための積極的な議論を巻き起こしていかなければならない時代に突入していることは確かと考えられる。

こうしたなか、斯学において惑星都市理論(プラネタリー・アーバニゼーション研究)¹⁾への注目がにわか集まっている。惑星都市理論で語られる野心は、「従来の都

市研究を刷新すること」とされている(平田 2021, p.13)。『ル・モンド・ディプロマティーク』に掲載されたアンリ・ルフェーブル(1989=2018)の「地球の変貌」において、「都市的なものの地球化」と表現された論考が原点にあるとされる。そのルフェーブルの論考が、フランクフルト学派も参照しながら批判的都市理論研究を構築してきたニール・ブレナー(2009=2019)の惑星都市理論に引き継がれてきている(平田 2021, pp.12-13)。

惑星都市理論の中核的特徴には、ヒンターランド(後背地)の危機への喚起がある。ブレナーが着目したように、地球規模の産業的な都市化を下支えすることの代償として、不均等な囲い込み、インフラストラクチャーの整備などにより、ヒンターランドが資本主義的發展のもとでの「作業現場」として根本的かつ破壊的につくりかえられるとする危機意識である(渡邊 2021, p.74)。そのうえでブレナーは、ルフェーブルの言葉を借りつつ、「都市的なもの」は普遍化した惑星規模の状況となってしまうこと、その状況のなかでは/その状況を通して、資本蓄積、政治・経済的生活の規制、日常的な社会諸関係の再生産、地球と人間性のあらゆる未来をめぐる論争が編成されるとしている(ブレナー2009=2019, p.169)。こうした地球の都市形成過程を吟味することを目的とするのが惑星都市理論とされている(平田 2021, p.19)。

この惑星都市理論をめぐる、本稿としては次の2点を深耕する必要があると捉えている。一つは、惑星都市理論の理論的比重の問題である。筆者が読み解く限り、ブレナー(2009=2019)ではフランクフルト学派の批判理論に比重が置かれている。しかし惑星都市理論は、ルフェーブル(1989=2018)に双璧の原点がある。気がかりなのは、惑星都市理論においてルフェーブル(1968=2011, p.36)の都市計画的思惟批判への言及が少ないことにある。もちろん、惑星都市理論においても「都市中心主義」「都市への権利」「空間の生産」(平田・仙波編 2021)は話題となっている。ただ、ルフェーブルのいう「決定の中心」(1968=2011, p.45)への批判を主軸に議論がなされなければ、惑星の都市化の「要因」が明らかにならないのではないだろうか。ルフェーブルの都市計画的思惟批判を深耕することが必要と考えられる。

もう一つは、地球の都市形成過程の吟味が目的とされている(平田 2021, p.19)とはいえ、もう少し惑星の都市化への処方箋が提案されてもよいのではないかという問いがある。確かに、十分な診断がなされぬまま処方箋が連発されているような現状への危惧(平田 2021, p.18)には留意しておかなければならない。ただ、ブレナー(2009=2019)では、批判理論としてのフランクフル

ト学派的な考え方が「なにをなすべきか」にあると捉えられている(p.166)。こうした起点を勘案するならば、「都市中心主義」²⁾(平田・仙波編 2021)に陥ることのない処方箋を弁証法³⁾的に考える必要は少なくともあろう。弁証法的に導き出される“新型ワクチン”の投与が、惑星の都市化を引き起こす官僚主義やグローバル資本主義からの反転攻勢につながる可能性は想定されてよい。トップダウン的に唯一の普遍モデルを課すような閉じた体系ではなく、経験に裏づけされた認識にひらかれ、ボトムアップ的に思考の線を描き出すことができるような問題提起的で、発見的な理論(平田 2021, p.25)とこのことなので、惑星都市理論の“周辺”に存在する筆者からささやかな処方箋を提供しても、多少は許されよう。

どのような処方箋を提供するか——。本稿では、ルフェーブルのいう都市という現実から出発して、倫理あるいは美学との弁証法のなかでの空間的实践⁴⁾の止揚(ルフェーブル 1968=2011, pp.193-194; ルフェーブル 1974=2000)に着目する。美学をめぐるのは、消費社会を喚起する「遊戯的中心」批判がなされるなど(pp.179-206)、議論が活発に展開されている。しかし、倫理に関してはほとんど言及がなく、課題として残されたままとなっている。これは、経済地理学者のデヴィッド・ハーヴェイ(1990=1999)において指摘されているように、「倫理は実際に美学によって包み隠され」た(p.435)ことに起因していると考えられる⁵⁾。問題は、どうやって美学から倫理の道りへと反転させていくか、にある。そこで本稿では、ルフェーブル理論を踏まえて、経済主義のみではなく空間的实践のなかで倫理的アプローチを活性化する研究に挑む。特に、倫理的都市論とコミュニティ経済論という2つの処方箋が、惑星の都市化の抑制と対峙する空間的实践の止揚において大事な視角になりうると理論的に論じることを目的としたい。

ここで、倫理的都市論とコミュニティ経済論の視角を提供する理由を示しておこう。両概念は、惑星の危機を俯瞰しながらローカルなコミュニティでの倫理的喚起や空間的实践を重ねようと試みたものとなっている。一方の倫理的都市論では、都市における身近な場所的コミュニティから、貧困と不平等、統治、民主主義、社会的包摂、持続可能性と気候変動などの諸問題に対して、「設計図(青写真)」ではない解決策が講じられている。コロナパンデミックの経験も踏まえた2020年代~2030年代の都市とそのコミュニティの諸主体が手がける必要のある倫理的喚起が目標に定められており、ルフェーブル理論も踏まえながら倫理的都市への権利が提起されている(Barrett, Horne and Fien, 2021)。

他方のコミュニティ経済論は、グローバル資本主義への抵抗に向けて、多様な経済を取り戻すための倫理的配慮を中心とした経済が講じられている。コミュニティ経済論も「設計図」なき概念として提案されており、公平な生、社会と環境への余剰分配、持続可能な消費、自然と文化のコモンなどが議論される (Gibson-Graham, Cameron and Healy 2013)。

確かに既往研究においても、都市化や地球環境問題に対処するという文脈において資本主義的な倫理的アプローチはなされてきている。たとえば、アダム・スミスの道徳経済観やヴェブレンによる「生産倫理」を参考にした、経済学者の宇沢弘文 (2000) による社会的共通資本論⁹、宇沢の弟子で「資本主義の中核にある倫理」を取り上げた岩井 (2019, p.57)⁷などがある。これらの研究を大胆に俯瞰すると、専門家を必要とする「倫理」が資本主義に内包させて取り扱われている (宇沢 2000; 岩井 2019)。しかし、これではマックス・ウェーバー (1920=1989) の警鐘が浮かび上がってしまう。職業義務という資本主義文化の「社会倫理」が、意図せず「鉄の檻」⁸の現出に至るとする逆説である (pp.50-51)。

対して、ルフェーブル (1968=2011) が言おうとしたのは、倫理を経済主義ではなく、実践による止揚に向かわせるプロセスにある (p.193)。こうした空間的实践 (ルフェーブル 1974=2000) が必要とされるのは、「興業者たち」の都市計画によって破壊された都市の巨大な「空虚」からの回復のためだろう (ルフェーブル 1968=2011)。これらルフェーブルの関心が、倫理的都市論とコミュニティ経済論にも通底している。すなわち、「興業者たち」の都市計画 (ルフェーブル 1968=2011) —— 経済地理学者のマイケル・ストーパー (2016=2017) による「新自由主義的統治」⁹との言葉が想起される——に取り込まれてしまう危機を回避するために、倫理を資本主義あるいは経済主義のみの論理に内包せず空間的实践のなかにあるものとして扱うことが、惑星の都市化という喫緊の課題に対峙する新たな視角を開く道筋となる。

本稿の構成は、以下の通りである。第2章では、惑星都市理論の現在地を整理し、その貢献と課題を述べる。第3章では、惑星の都市化の抑制を目指すにあたってルフェーブルの都市計画的思惟批判、都市への権利、空間的实践を整理し、倫理的都市論とコミュニティ経済論に接続する布石とする。第4章では、倫理的都市論とコミュニティ経済論を詳しく検討して、惑星の都市化への処方箋としての定位を試みる。最後に第5章では、第4章までの考察を踏まえて、本稿なりの結論と展望を示す。

2. 惑星都市理論の現在地

2.1. 惑星の都市化という危機への警鐘

まずは、惑星都市理論について、平田・仙波編 (2021) を中心に、「地球の都市形成過程を吟味すること」 (平田 2021, p.19) に倣って概説してみよう。

惑星都市理論は、1960年代を起点とする都市研究の領域から生まれたとされる。系譜を辿ってみると、1970年代を始まりとするケインズ主義的国家とフォーディズム的組織の危機が綴られている。労働組合の弱体化、旧来の政治的左翼の衰退、サービス経済にシフトしていく1980年代以降になると、経済的な観点よりも文化的な観点から資本主義を批判的に考察したデヴィッド・ハーヴェイやポストモダン地理学者のエドワード・ソジャなどが紹介されている。ジェンダー、エスニシティ、セクシャリティ、エコロジーといった「ポスト・モダンの条件」の登場である。そして1990年代前半には、都市社会学者のサスキア・サッセンやピーター・テイラーに代表されるグローバル・シティ論や1999年にシアトルで起きた反グローバリゼーション運動など、都市がグローバリゼーションや新自由主義と切り離しては考察できなくなったことが紹介されている (平田 2021, pp.10-12)。「巨大な資本を呼び込み地球の果てにまで影響を及ぼす都市化の過程は、それ以前の都市化を特徴づけていたような均質化ではなく、地域間の不均等発展を強めるもの」であったとある (p.16)¹⁰。

こうした都市化過程を経るなかで、惑星都市理論が興るきっかけの一つに、第1章で触れたルフェーブルによる「地球の変貌」 (1989=2018) がある。ルフェーブルの危機意識は、次のようなものである。すなわち、①新たな脅威として都市的なものの地球化が存在すること、②何もこの運動を制御しないのであれば都市的なものは三千年紀のあいだに空間全体に拡大すること、の2点である。そしてルフェーブルは、巨大な空間の均質化と多様性の消失という世界的拡大が「危険なしには進展しない」と警鐘を鳴らす。そのうえで、「いずれ、地球の表面には、農業生産に従事する島々とコンクリートの砂漠しかもはや残らないようになる。それゆえ、環境問題の重要性が浮かび上がる」 (ルフェーブル 1989=2018, p.100) として、2021年のわれわれが直面している現在地を予見したメッセージが発せられている。

こうしたルフェーブルの危機意識が、批判的都市理論を専門とするブレナーに受け継がれてきた (平田 2021, pp.12-13)。ただ、ブレナー (2009=2019) はルフェーブル理論のみを原点としているのではなく、フランクフルト学派にも依拠する。ブレナーは、ルフェーブルとフ

ランクフルト学派との弁証法的研究のなかで、批判的都市理論研究から惑星都市理論を構築してきたといっただろう。

ブレナーの惑星都市理論では、フランクフルト学派が重視した「理論」「再帰」「道具的理性批判」「現実と可能性の断絶」という批判理論の主要な要素としての4つの命題の確認が行われている(ブレナー2009=2019, p.165)。ブレナーによると、批判理論としてのフランクフルト学派的な考え方が「なにをなすべきか」(p.166)にあるとしたうえで、「私は信じている…(中略)…批判理論の考え方を是認する」(ブレナー2009=2019, p.168)と信条が述べられている。そして、ブレナーが論じる批判的都市理論が「知的・政治的な地勢のもとで発展してきた」こと、「その地勢は、マルクスだけでなくフランクフルト学派の様々な理論家達によってすでに広範囲に耕されてきた」ことが説明されている(p.168)。

ここでの留意点は、ブレナーの基本姿勢があくまでもフランクフルト学派基準の「何をなすべきか」(ブレナー2009=2019, p.166)に置かれていることにある。筆者なりに解釈する限り、それゆえ、なんらかの処方箋を講じて行動していこうとする姿勢が惑星都市理論では問われるように映る。確かに「資本主義的な都市化が世界規模での創造的破壊の前進運動を続けているからこそ、批判の意義や様相は決して潰えることはない。対照的に、その前進運動が生み出す過程および様々なコンフリクトにおいて不均等に進展する政治的・経済的地理との関連で、批判の意義や様相は絶えず存在を蘇らせる」(ブレナー2009=2019, p.168)とブレナーはいう。こうしたブレナーの考え方が、ある事象を取り巻く事象の連関を問い、全体の布置を浮かび上がらせ、それを見通し、そこから社会空間を診断すること、これが地球の都市形成過程を吟味すること(平田2021, p.19)との見解につながっている。本稿が惑星都市理論の基本的価値観を共有しながら、吟味のうえで惑星の都市化への処方箋を提供してみようとするに至ったのは、ブレナーの批判的都市理論に倣った姿勢でもある。

いずれにせよブレナーは、惑星の都市化の現実を鋭く洗い出していく。ハーヴェイたちの見解を引用しつつ、次の5点を集約する。すなわち、①地理経済的統合の加速、②強まる資本の金融化、③福祉国家的干渉の戦後モデルの危機、④国家形態の未だ進行中である新自由主義化、⑤惑星規模で生じる環境危機の深刻化である(ブレナー2009=2019, p.169)。これらの5点が踏まえられながら、惑星都市理論の枠組みが整理されていく。

2.2. 惑星都市理論の枠組み：その貢献と課題について

惑星都市理論の枠組みには、いくつかの区分がある。本稿では、1)「都市化」をめぐる区分、2)「人新世」と「資本新世」の位置づけをクローズアップしてみたい。

まず、前者の1)からみてみることにしよう。惑星都市理論が前進するなかで、ブレナーとシュミットは「都市化」をめぐる次の2つの区分を行うに至っている。この2つの区分が、惑星都市理論の核といえる。一つは、従来の都市研究の領域で扱われてきた都市集積に関わる「高密度の都市化」である。もう一つは、既存の都市研究において「非都市的」な領域としてみなされていた後背地(海、山、砂漠といった従来の都市とは異なる「自然」によって特徴づけられる地域)に波及する、都市化の影響を分析の対象に据える「広範囲の都市化」の区分である(Brenner and Schmid 2015, p.164; 平田2021, p.14)。この見方を基準に惑星都市理論は、従来の地理的境界を超えた社会・空間関係の動態を分析対象に据えたとされている。そのうえで、従来の都市のスケールを超える「広範囲の都市化」に関する考察とインフラストラクチャー研究が交差する地点が位置づけられている(平田2021, p.18)。

特に「広範囲の都市化」は、大事な指摘でもある。これまでの都市研究で「ブラック・ボックス」とされていたヒンターランドへ改めて目を向けるものとなっている。ヒンターランドをめぐる都市研究とは、広範囲の操作的景観——資源採取、物流とコミュニケーション、エネルギーと食料生産、水の供給と管理、廃棄物処理と環境計画のためのインフラストラクチャーを含む——の産出や、その絶えざる再編成といった「自然の都市化」の過程が分析対象になっている(ブレナー2014=2018, p.120; 馬渡2021, pp.355-356)。

ここでのポイントは、「メタボリックな都市化」という現状への指摘にあらう。都市は、労働力、材料、燃料、水、食料といったさまざまな代謝的投入物に下支えされるとともに、廃棄物、汚染、炭素のように多種多様な代謝的排出物を非都市の空間に産出している。言い換えれば、これらの大部分は都市で生産されるが、最終的には非都市の領域に吸収されてしまう(Brenner and Katsikis 2020, p.25; 渡邊2021, p.89)。だからこそ惑星都市理論において、ヒンターランドという「ブラックボックス」を開放する枠組みが求められている。すなわち、資本主義的な都市化という複合的かつ不均一であり、多種多様で危機的な世界のエコロジーのなかで、共生・共進化するモメントとして、歴史的・地理的に特異な形態である都市空間と非都市空間を結びつけることのでき

る枠組みである (Brenner and Katsikis 2020, p.27 ; 渡邊 2021, p.91)。ハーヴェイの議論に引きつけながらブレナーが論じたように、「非都市の空間は「資本の都市化」を下支えする創造的破壊のプロセスの戦略的拠点であった。しかし他方で、これまでの都市論者が注意を払ってきたのは、もっぱら大規模で過密な都市の中心部だった」(渡邊 2021, p.84) との指摘が、苦言として呈されている。この点は、都市研究としての省察事項ともなる。

次に、後者の 2) について確認してみよう。「都市化」をめぐる上述の区分とその枠組みが示されるなか、惑星都市理論では、「人新世」と「資本新世」の位置づけに言及されている。オゾン層の研究でノーベル化学賞を受賞したパウル・クルツェンが、これまでの「完新世」と呼ばれる地質時代と区別される「人新世」という時代区分を広く流通させることになったことは、惑星都市理論でも確認されている (平田 2021, p.8)。「人間の活動が地球の活動に対して影響を及ぼし、返す刀で温暖化のような気候変動が「自然の復讐」のように現れ、人間を含む生物の生息環境を圧迫する」のが「人新世」の概念と捉えられている (p.9)。

他方、惑星都市理論では「人新世」の確認を経たのち、次の 3 点が議論の俎上にのぼっている。①地球官僚として容易に科学者が権力に結びつき「無知なる大衆」を啓蒙するというナラティブに対する批判、②気候変動の責任を人類全体に等しく負わせるのではなく、資本の活動に帰すべきだとして人新世に代えて提案される資本新世という枠組み、③カタストロフ的帰結を含めたいくつものシナリオに関する分析、の 3 点である (桑田 2017 ; 平田 2021, p.9)。なかでも惑星都市理論で意識されているのは、「人新世」から「資本新世」への過程にある。先述の渡邊 (2021, p.94) では、「人新世」が言外で意図する「人類の敵は人類」は問題の核心を隠蔽しているとの主張が展開されている。それゆえ渡邊は、「人類の敵は資本主義」に力点がおかれた「資本新世」の意義を惑星都市理論において強調しようと試みている (p.98)。

気持ちは分かる。しかし、こうした「資本新世」の位置づけをめぐるのは、ルフェーブルを原点とする惑星都市理論と認識される限り、読み手として悩ましさを覚えてしまう¹¹⁾。①と③については理解できるところだが、他方で、②については慎重な議論も必要ではないだろうか。というのも、マルクス主義経済学の立場であったとしても、「人新世」への希望が語られているからである。たとえば、第 1 章の導入で触れた経済思想家の斎藤幸平 (2020) は、次のように述べている。

「資本主義が地球を壊しているという意味では、今の時代を「人新世」ではなく、「資本新世」と呼ぶのが正しいかもしれない。けれども、人々が力をあわせて連帯し、資本の専制から、この地球という唯一の故郷を守ることができたなら、そのときには、肯定的にその新しい時代を「人新世」と呼べるようになるだろう。」

(斎藤 2020, p.364)

グローバルな資本主義の多様な景観全体にわたる都市の状態がつねに外破しつつけるなかで、居住ベースの都市化の概念は維持できる? (ブレナー 2016=2021, p.66) と問いかげられると、ネガティブな地球の未来を想起してしまいがちにもなる。「都市中心主義」の都市研究が、疑問の余地なく成立しえたのは、まさに 20 世紀という特殊な「都市の時代」であったから (渡邊 2021, p.98) との主張には頷ける。資本主義がグローバルな空間拡張とともに肥大化して惑星の都市化に至ったのが、現実の地理としての現在地であろう。惑星の都市化が現実となった今、都市研究に何ができるのか——。筆者のようなローカルなコミュニティ研究者には、ある種の無力感も覚えてしまう。一方で、上述の斎藤幸平の知見に耳を澄ましていると、「都市中心主義」からの脱却をはかる希望を語っていくことが都市研究にも必要に思えてくる。惑星都市理論のいうヒンターランドへの眼差しを大切にしながら、都市に住まう人たちが官僚主義に陥らずに連帯を育み、「資本新世」に陥らない経済のあり方を模索する意識変革 (処方箋) への希求である。だからこそ惑星都市理論も最終的には「都市という対象と格闘するための視座をもとめて」(仙波 2021, p.400) いるのだろう。

惑星都市理論の現在地は、経済地理学者の長尾謙吉 (2013) の言葉を借りるのならば、「結果」としての地理が十分に示されて「要因」としての地理を考え出そうと助走している段階にある。「要因」を洗い出していくなか、「人類の敵は資本主義」と断罪しようとしても、惑星の都市化への処方箋とはならないだろう。スミス、マルクス、ケインズを架橋しつつ「資本主義を取り除いても解決にはならない」と述べるドイツの経済ジャーナリストのウルリケ・ヘルマン (2016=2020) の見解も踏まえるならば、資本主義を安易に「廃棄」せず、他方でルフェーブルのいう都市計画的思惟批判の中身を吟味するなかで、環境可能論としての地理の惑星スケールの未来を模索し、対峙を続けることが肝要だろう。「新自由主義的統治」(ストーパー 2016=2017) 的な「設計図」は不要だが、惑星の都市化の責任の一端がある都市研究から処方箋の生成可能性を探ることが求められる。

3. 都市への権利と倫理的アプローチ

3.1. ルフェーブルの都市計画的思惟批判

本章では、惑星都市理論の原点とされるルフェーブルの知見について、本稿なりに検討してみることとしたい。まず本節では、次の2つを確認したい。

一つは、ルフェーブル (1968=2011) の「都市=田舎」論である。惑星都市理論での「都市=田舎」論は「地球の変貌」(ルフェーブル 1989=2018) への依拠が多い。しかし、その萌芽的な見解は、『都市への権利』(ルフェーブル 1968=2011) で既に語られており、何が語られていたのか、ここで再確認が必要と考えられる。

もう一つは、都市計画的思惟批判の整理である。平田・仙波編 (2021) 『惑星都市理論』においても、人文地理学者の荒又美陽がパリの題材に「都市のリスケリングと排除/包摂の論理」を論じた際、ルフェーブルの「三つのプロセス」に触れている(荒又 2021, p.30)。「三つのプロセス」——「3つの時期」——とは、1) 工業や工業化の過程、2) 都市化の拡がりや都市社会の一般化、それに伴い都市現実が破壊される過程、3) 都市現実における階級戦略の変形と「決定の中心」の置換を指す(ルフェーブル 1968=2011, pp.38-39)。第3段階が難解に映るが、要は、第1章で触れた「新自由主義的統治」(ストーパー 2016=2017) のことと理解できる。そのうえで本稿としては、ルフェーブル (1968=2011, pp.42-45) による都市計画をめぐる「3つの区分」のほうを重点的に紹介して、第4章の倫理的都市論とコミュニティ経済論に接続する布石を打つこととしたい。

まず、「都市=田舎」論を検討してみることにしよう。1968年時点においてルフェーブルが言うに、「こんにち、都市=田舎の関係は、一般的変異の重要な相として、変貌している」とする(ルフェーブル 1968=2011, p.105)。この「都市=田舎の関係は、歴史的諸時期を経るあいだに、時代や生産様式に応じて、深く変化した」とされている(p.104)。ここで注意しておく必要があるのは、田舎と農村との差異にある。ルフェーブルのいう田舎には、『都市への権利』でのキータームの一つとなる都市生活の意味が含まれており、農村と区別されている。「都市生活は、家内工業とか都市的中心(商業的および工業的、配給網、決定の中心など)の利益において死滅する諸々の小さな中心とかいった伝統的な諸要素を農村生活から失わせつつ、農村生活のなかへ侵入する」としたうえで、「村落は、農村の特殊性を喪失しつつ、田舎化する」(ルフェーブル 1968=2011, p.106)。「都市=田舎」は、二分法的な区分という意味よりもむしろ、田舎にも都市的な要素が浸透してしまっている状態を指す。ルフェーブ

ルにとっての都市生活は「都市と田舎と自然とのあいだの独自の諸々の中間項を含んでいる」(p.104)。これが、第2章で検討した惑星の都市化の原点となっている。

「田舎が都市のただ中に姿を没し、都市が田舎を吸収して、そこに散失するような一般化された混ぜ合わせが指定される」(ルフェーブル 1968=2011, p.106)。問題はどのように都市が田舎を吸収したか、にある。ルフェーブルはその「要因」の一つに「都市の織り目」をあげる。「都市の織り目というものは、ひとつの都市あるいは新旧さまざまなくつかの都市のまわりに構成される整合的な統一した生態体系という概念」という(ルフェーブル 1968=2011, p.22)。簡潔に言い換えると、都市が郊外や田舎までスプロール化した地理的現実にあたる。

ただ、ルフェーブル (1968=2011) は、都市生活をそこまで悪いように捉えていない。使用価値ではなく交換価値が重視された「都市」「都市的なもの」を問題視している。都市および都市生活、都市的時間といった意味が含まれる使用価値は、売買される空間、諸々の生産物、財貨、場所、記号の消費としての交換価値と対立関係にある(p.48)。そのような生き方、すなわち、交換価値が重視された「物質の諸体系や、価値の諸体系を内包している」(p.22) ことが、「膨張する都市は、田舎を攻撃し、腐蝕させ、解体する」(p.106) 結果を招くこととなる。

ここで気になるのは、交換価値がどのように重視され、拡がりをみせるようになってきたかという歴史的経緯ではないだろうか。この点が本節での2つ目の検討事項、ルフェーブルの都市計画的思惟批判の確認となる。なお、誤解のないようあらかじめ留意点を述べておくが、ルフェーブルが問うのは、都市計画の質とその変質の過程にある。「ただたんに都市計画に関する諸々の思惟や活動を批判のふるいにかけることをもくろんでいるだけではなく、「意識のなかへ、政治的プログラムのなかへと入らせることをねらい」とすることへの批判が話題となっている(ルフェーブル 1968=2011, p.8)。この点は、「ルフェーブルであれば、震災復興の政策や計画が政治的道具として用いられ利権にからめとられてしまうメカニズムはもちろん、安易に「都市計画」を欲望してしまう私たちの心性こそを問いただしたであろう」とする南後 (2011, p.246) の例示をみると、的を射ていて分かりやすい。

さて、ルフェーブル (1968=2011) では、「都市計画的考察には唯一あるいは単一の歩みがあるのではなく、この操作的合理主義に関するいくつかの標定しうる傾向が存在する」(p.42) として、都市計画が3つに区別されている。

1 点目は、善意の人びと（建築家、作家）の都市計画である。ここでは「古典的な自由主義的人間主義」と「その郷愁」に疑問が投げかけられている（ルフェーブル 1968=2011, p.42）。ルフェーブルのいう「古い人間主義」とは、（一例として）ハイデガーによる《実存主義》を指す¹²。「しかしながら、ハイデガーの思想を要約している諸々の喩は、都市から来るのではなくて、《存在の牧人》とか《森の道》のごとき始源的・前時代的な生活から来る」（pp.58-59）と、ルフェーブルは権威主義に対する批判を展開する。これは、第1章でも触れたマックス・ウェーバー（1920=1989）の警鐘にも通じる。ただ、1 点目の都市計画区分では、改善のための議論の余地も示唆されている。プロレタリアートによって「新しい人間主義」が生み出されると、都市における彼ら自身の日常生活が交換価値ではなく使用価値に基づく「都市的人間」へと転換する希望である（ルフェーブル 1968=2011, pp.215-216）。ここで確認しておく必要はない大切なことは、第4章にも接続されていくことだが、惑星の都市化への処方を考えるのもまた「都市=田舎」においてであり、都市生活というコミュニティに暮らすわれわれの集団としての責任ということであろう。

他方、2 点目と 3 点目には厳しい視線が向けられている。2 点目は、公的（国家的）な圏域に結びついた「理事者たち」の都市計画である。「科学的であることを欲する」、そして、「この科学主義は、いわゆる《人間的要素》なるものを無視する傾向をもっている」としている（ルフェーブル 1968=2011, p.43）。3 点目は、「興業者たち」の都市計画である。ルフェーブルは、この 3 点目の区分を問題視する。「公然と、市場のために、利益を目的として、構想し実現する。新しいこと、近年にはじまったこと、それは彼等がもはや住居や家屋を売るのでなく、都市計画を売る」。すなわち、「都市計画は交換価値」になるという。そして「興業者たち」の企図としての特権的な機会や場所を恣にする（ルフェーブル 1968=2011, p.44）。本稿の文脈に位置づけると、2 点目と 3 点目が「新自由主義的統治」のもとでの都市戦略と捉えられる。こうした「興業者たち」が「特権的な消費の中心」「更新された都市の建設」を行い、「消費による幸福のイデオロギー、新たな使命へと適応させられた都市計画による喜びのイデオロギーを、《読み取れる》ものにしながら、押しつける」という（ルフェーブル 1968=2011, p.45）。具体的に例示しておく、大阪・関西万博とカジノ・IR を経済戦略の「支柱」とした大阪の「興行的都市政策」があげられるだろう（森 2021）。大都市圏経済の「支柱」をねらう「都市再開発」は危うく、支柱の所在を考えな

おさなければならぬ時期にきている。これがコミュニティ経済論との関連で大事になってくる（杉山 2020a）。

いずれにせよ、ここで再確認しておく必要があるのは、先述の「都市の織り目」の問題との関連にある。すなわち、「都市の織り目に支えられて、都市的な社会や生活が、田舎へと浸透する」（ルフェーブル 1968=2011, p.22）この流れにある。ルフェーブル（1968=2011）の「都市=田舎（=自然）」論の核心的関心は、本来、使用価値に基づく都市生活が、交換価値に変貌した「都市的なもの」として運搬されることへの危惧にある（p.176）。都市の《内破=外破》（p.20）——筆者なりに解釈しておく、都市化に伴う都市の内側も外側（田舎や自然）も凄まじく破壊される現象——にさらされているからこそ、「地球の変貌」（ルフェーブル 1989=2018）に至ってしまっている。その「要因」の一つとして、上述した国家と興業者が複合化するなかで行われる「新資本主義」¹³的都市計画の存在があるとルフェーブル（1968=2011）から窺い知ることができる。

3.2. 「空虚」と「処方」

ルフェーブル（1968=2011）の「新資本主義」的都市計画への批判をめぐって『都市への権利』を読み進めていると、本稿で大切となる鍵概念に行きつく。それは、空虚、処方、倫理である。ルフェーブルを参照することの多い斯学において、上述の 3 つの概念が斯学でそれほど扱われていないことに、筆者は意外性を覚えている。

「新資本主義」的都市計画についてのルフェーブルの最大の関心は、それが生み出されてしまう原因としての「記号」のあり方にある。ルフェーブルは、身近な集団のなかにおける諸個人の関係や集団間関係など都市生活における実践的=感覚的な現実としての近い秩序と、教会や国家、法規など大きくて強力な制度という意味での「遠い秩序」から考察を重ねていく。権力を付与された水準に設立され、自分を押しつける、抽象的、形式的、超感覚的、超越的な「遠い秩序」は、宗教的、政治的イデオロギーとして道徳的および法律的な原理を含む（ルフェーブル 1968=2011, pp.72-73）と評されている。

こうした考え方は、ルフェーブル特有のものでもなさそうである。たとえば、本稿で幾度か登場させているウェーバー（1920=1989）においても垣間見ることができる。ウェーバーによると「秩序界は現在、圧倒的な力をもって、その機構の中に入り込んでくる一切の諸個人の…（中略）…生活スタイルを決定しているし、おそらく将来も、化石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで決定しつづけるだろう」（p.365）と、惑星の都市化に

直面する 2021 年の現代を見透かしていたかのような見解が述べられている。そのうえで「禁欲が世俗を改造し、世俗の内部で成果をあげようと試みているうちに、世俗の外物はかつて歴史にその比を見ないほど強力になって、ついには逃れえない力を人間の上に振るうようになってしまった」。そして、「禁欲の精神」が鉄の檻から抜け出してしまい、「ともかく勝利をとげた資本主義は、機械の基礎の上に立って以来、この支柱をもう必要としない」と顛末が語られている (ウェーバー1920=1989, p.365)。

問題は、ここからである。ルフェーブル (1968=2011) に戻ると、「この遠い秩序は、実践的=感覚的な現実のなかに投影される。それは、そこに書き込まれることによって、見えるものとなる」(p.73) という。そして、次のように指摘する。

「都市は、遠い秩序のなかに内包されつつ、その秩序を支え、それを体現し、それを地所 (風景) の上に、面の上、直接的生活の面の上に投影し、それを記入し、それを処方し、考察によらなければそのようなものとして捉えることのできないより大きな文脈のなかにあるテキストとして、それを書く…。」

(ルフェーブル 1968=2011, p.73)

ルフェーブル (1968=2011) は、少なくとも都市現実における都市生活を回復させること (p.152)、すなわち、交換価値から解放された使用価値を重んじる生活への権利を論じようと試みている (p.214)。そうした都市への権利で期待されているのは、実践的=感覚的な現実なのだろうが、残念ながら「遠い秩序」に侵蝕されてしまっている「現実」がある。「現実」とは、ルフェーブル (1968=2011, p.73) の表現にそって理解するならば、権威的な道徳と法規に基づく「秩序」¹⁴、すなわち、人びとの意識から遊離した「記号」といえる。これが人びとの感覚へと無意識に記入されており、あたかも「処方」されているかのような「現実」として立ち現れている。そうした都市生活と異なる別種の「現実」が、ルフェーブルが懸念する「空虚」なのである。ルフェーブルは、「都市とか都市現実とかの意識は、消滅するにいたるほど、衰弱している」と強調したうえで、「都市の実際のおよび理論的 (イデオロギー的) な破壊は、巨大な空虚を残さないわけにはいかない」(ルフェーブル 1968=2011, p.38)。

「都市への権利」とは、必ずしも一義的なものではなく、「古い都市への権利ではなくて、都市生活へ、刷新された中心へ、出会いや交換の場所へ、これらの時や場所の十分で十全的な使用を許すような生活のリズムや時間

割へ、などの権利」とされている (p.214)。ここには、交換価値や「新資本主義」的都市計画といった「空虚」も、使用価値や都市生活とともに存在する。ルフェーブルは、「都市なるものの問題性は、哲学の問題性、その範疇や方法を更新する」(ルフェーブル 1968=2011, pp.205-206) としており、上述の交換価値に基づく「現実」を「破壊したり排去したりする必要はない」、ただ「これらの範疇は、別の新しい何物か、すなわちある別の意味を受け取る」という (p.206)。この点において、惑星都市理論での「資本新世」の強調が危惧される。

正しい理解は、「都市への権利」に対するハーヴェイ (2012=2013) の見方にある。ハーヴェイはスイスの言語学者であるソシユールの表現を用いて、「都市への権利」すら「空虚な指示記号 (シニフィアン)」とする。そして、「いっさいは、誰がどんな意味をそこに込めるのかに依存している。金融投資家と開発業者もそれを要求しうるし、そうするあらゆる権利を持っている」(p.18) と、ルフェーブルが提唱した「都市への権利」に忠実な分析を行っている。これが、ルフェーブルの考える「新資本主義」との対峙の仕方といえる。ルフェーブル (1968=2011) は、「批判的分析のためには、空虚よりも、都市の終焉とか、切断された毀損されてはいるが現実的な都市社会の拡張とかによって特徴づけられる葛藤的状况の方が、より重要」(p.38) と実践の希望を棄てていない。こうしたルフェーブル (1968=2011) の想いに、惑星の都市化が進む現代のわれわれが応えるとするならば、「空虚」と化してしまっている「現実」を、都市生活の宣言や実現といった実践的=感覚的な現実として都市への権利を取り戻すことが求められる (p.214)。すなわち、「空虚」の改善に向けての権利として、実践的=感覚的な現実を取り戻す処方を打つことが求められる。

3.3. 都市への権利を取り戻す倫理的アプローチ

では、理論的ながらも具体的に、どのような処方箋を考えるか。ここからは、図 1 と図 2 も参考に議論を進めてみよう。ルフェーブル (1968=2011) は、「経済学の時代、自由主義的経済主義と計画化的経済主義というふたつの異種をともなった経済学の支配の時代があった」ことを踏まえながら、「こんにち、経済主義の止揚が粗描されている」と問題提起をはじめ。そして、自由 (市場) と計画 (統治) の止揚をめぐる、次のように問いかけをはじめ。「何にむかってであろうか。ひとつの倫理あるいは美学、ひとつの道徳主義あるいは審美主義にむかってであろうか。新しい《価値》にむかってであろうか」(p.193)。これまでの考察を踏まえるならば、美学は都

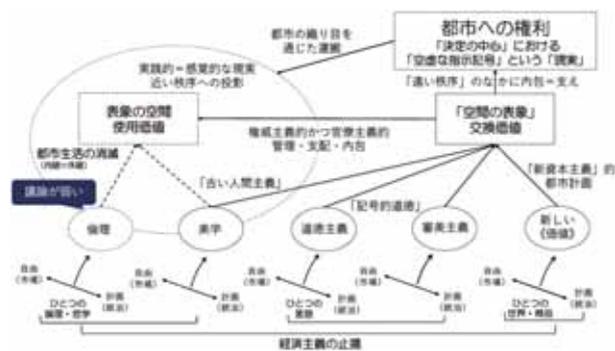


図1：「決定の中心」と「空虚な指示記号」への動員
 (出所) ルフェーブル (1968=2011; 1974=2000), ハーヴェイ (2012=2013) を参考に筆者作成。

市の哲学の問題といえる。「古い人間主義」と新しい人間主義のはざまでの止揚があるが、誤れば、交換価値をベースとする「空間の表象」へと動員されかねない。「ひとつの言語」と位置づけられた「道徳主義」「審美主義」、「ひとつの世界」「ひとつの商品」と位置づけられた「新しい《価値》」=「新資本主義」も「空間の表象」へと動員されていく (ルフェーブル 1968=2011; 1974=2000)。この文脈におけるルフェーブルの《経済主義的》イデオロギーへの見方は厳しい。「もはや、資本主義的な過剰利潤や過剰搾取とか、国家の利益における経済の統御…(中略)…とかいう戦略的意図を隠蔽している」と批判する (1968=2011, p.188)。しかし、先述の杉山 (2020a) や森 (2021) も踏まえると、まっとうな批判だろう。

こうした交換価値を基盤とする「空間の表象」が、使用価値を重視する表象空間 (ルフェーブル 1974=2000) に対して、権威主義的かつ官僚主義的に管理・支配・内包を進める。一方で、「遠い秩序」のなかに内包され支えとなる交換価値は、「決定の中心」における「空虚な指示記号」という「現実」としての「都市への権利」に至る。この「都市への権利」が「都市の織り目」を通じた運搬を経て、実践的=感覚的な現実という近い秩序への投影が行われる。それに伴い「内破=外破」という惑星レベルの都市生活の消滅 (破壊) が起こるのである (図1)。

しかし、ルフェーブル (1968=2011) としては当然、図1のような状況は避けたいわけである。先ほどの経済主義の止揚の向かう先について、「そうではない」と否定して、次のように続ける。「ことは、実践による、実践のなかでの止揚、すなわち社会的実践の変化に関する。何世紀ものあいだ交換価値に従属させられてきた使用価値が、先頭を取り戻すことができるのだ。どのようにしてであろうか。都市社会によって、都市社会のなかにおいてであり、なおも抵抗し、われわれにとって使用価値



図2：都市生活の回復と倫理的アプローチの可能性
 (出所) ルフェーブル (1968=2011; 1974=2000), ハーヴェイ (2012=2013)、ソジャ (1996=2017) を参考に筆者作成。

のイメージを保存しているこの都市という現実から出発してである」 (pp.193-194) (図2)。

図2で留意しておく必要があるのは、ルフェーブルのいう実践には、「空間の表象」と表象の空間に加えて、空間的实践の備わった三元弁証法が重視されているとするポストモダン地理学者のエドワード・ソジャ (1996=2017, p.97) による発展的示唆にあらう。「空間の表象」とは、科学者の空間、社会・経済計画の立案者の空間、都市計画家の空間、区画割りを好む技術官僚の空間、社会工学者の空間、ある種の科学的性癖をもった芸術家の空間など「思考されるもの」とされる。他方、表象の空間とは、生きられる経験にもとづく具体的空間、すなわち日常生活が営まれ、身体が置かれ、空間の「領有」を意味する使用価値に属する空間とされる。そして空間的实践は、そのあいだにおいて、表象の空間が「空間の表象」に制約をうけつつも、それに対するオルタナティブな力として作用するとされている (ルフェーブル 1974=2000; ソジャ 1996=2017, pp.86-90; 南後 2006) ¹⁵⁾。

図2に則して説明を続けよう。自由と統治との止揚の先には、経済主義が語る「ひとつ」の何かが大事なわけではない。空間的实践のなかに、倫理、美学、道徳主義、審美主義、「新しい《価値》」が包み込まれている。だからといって、決して「ひとつ」の何かを排除しようともしていない。繰り返すが、第2章で検討した惑星都市理論の「資本新世」や「都市中心主義」(平田・仙波編 2021) を一元的に否定しているわけではないのである。いずれにせよ、さまざまな葛藤が混在する空間的实践のなかから、表象の空間と「空間の表象」との止揚によって、都市生活の宣言や実現という実践的=感覚的な現実である都市への権利が取り戻されていく。「都市生活は、ほとんど完全に消滅していて、権力的な方途によっても、行政的な布令によっても、専門家たちの介入によっても鼓舞

することのできない都市の統治や参加の能力を、恢復し、強化することができる」とルフェーブル (1968=2011, p.152) は信じているのである。都市生活の恢復の対象は、言わずもがな、都市の使用価値と都市の統治、そして、プロレタリアートによる都市生活が営まれる場所への参加にある (図 2)。

一方で、ささやかな疑問にも気づく。ルフェーブル (1968=2011) は、美学をめぐる、文化の議論なども踏まえながら「古い人間主義」から新しい人間主義への転換をはかることによって、都市の哲学の語りを詰めてはいない。しかし、こと倫理となると、ほとんど内実の議論がなされていないのである。「道徳主義」とは異なる位置として倫理に触れられている (p.193) にもかかわらず、である。本稿としては、都市への権利を取り戻し、惑星の都市化への処方箋を考えていくにあたり、弁証法的な文脈のなかでの空間的実践のために倫理の問題に取り組むことが、「空虚な指示記号」という「現実」から使用価値を取り戻す鍵が隠されていると捉えている。この課題に取り組むため、第 4 章では、本稿の主題である倫理的都市論とコミュニティ経済論について詳しく検討してみることにしよう。

4. 倫理的都市論とコミュニティ経済論

4.1. 倫理的都市論概説：都市統治の転換とコミュニティ

本節では、本稿の主題の一つになっている倫理的都市論を検討したい。まずは簡潔に『倫理的都市 (Ethical Cities)』(Barrett, Horne and Fien 2021) の紹介をしてみたい。Barrett, Horne and Fien (2021) は、大阪大学 CO デザインセンター特任教授で国連環境計画 (UNEP) および国連大学の職員でもあるブレンダン・バレット、オーストラリア RMIT 大学の地理学教授であるラルフ・ホーン、同大学建築・都市デザイン学部教授のジョン・フィエンによる共著書である。バレットたちが倫理的都市の探究を開始したのは 2015 年という (p.xiv)。

本稿が倫理的都市論に接近する理由としては、主に次の 3 点がある。1 つ目は、個人主義化という意味での新自由主義に対して、「社会の解体」と「政治の退廃」を促すものとして警鐘が鳴らされていることにある。アメリカの政治理論家のウェンディ・ブラウンや政治経済学者のジョナサン・ホブキンの言葉を参考にバレットたちは、反民主主義的な政治の台頭は新自由主義の「怪物的な結果」として強く批判する。特に、「政治的起業家」のための空間が創造されていることと、同時に「政治的起業家」にその「空間」が操られていることが指摘されている (Barrett, Horne and Fien 2021, p.4)。すなわち、新自

由主義やそれを助長するグローバル資本主義を隠れ蓑に、権威主義や官僚主義の「空間」の復権が、倫理的都市論においても大きな問題関心になっていると解釈される。

この指摘は、経済地理学者のマイケル・ストーパーが鋭く指摘した、公共部門の投資、公共財、都市や地域にかかわる事柄における規制が着実に増加しているとする指摘にもつながる。すなわち、規制緩和された自由放任主義都市は現実世界で見つけるのが非常に困難とする逆説、すなわち「新自由主義的統治」が実は探し求められている (ストーパー 2016=2017) とする矛盾に満ちた政治経済状況と捉えられる。

2 つ目は、新自由主義的なエコロジカルとの差異の強調である。ハーヴェイ (2012=2013) の表現を借りるのなら、「新自由主義的倫理」(p.43) との差異となる。バレットたちによると、地球環境問題に対しては新自由主義も無関心ではないとする。ただ、規制緩和、市場至上主義、不平等の拡大、環境破壊などの社会的な悪影響や自由市場の「負の外部性」の責任を迫ってくる (Barrett, Horne and Fien 2021, p.6) と本質を突く。たとえば、良心的で実行可能な人たちが社会的かつ環境的な意味での正義の修復に向けて、二酸化炭素排出量を減らし、廃棄物をリサイクルする時間、知性、資源のボランティア的提供が求められている (p.6)。一見すると、善いことに映る。ただ、一部の都市と個人への責任を押しつける新自由主義的な問題解決は望ましくないとバレットたちは主張する。そのうえでバレットたちは、地球上すべての持続不可能な現代都市を議論の俎上にのせること、それに伴う「実存主義的」な脅迫に逃げるのではなく、世界が直面するさまざまな脅威への取り組みを推し進めることが期待されている (Barrett, Horne and Fien 2021, pp.9-10)。そうした期待のなかから、倫理的都市論ではコミュニティへの希望が語られていく。

3 つ目は、惑星の都市化への危機意識の共有である。Barrett, Horne and Fien (2021, p.34) の肝要な箇所において、第 2 章で確認したブレナーたちによる批判的都市理論が参照されている。惑星の都市化の時代に直面する課題への対応としてバレットたちは、惑星都市理論を意識していると理解してよいだろう。こうした惑星レベルの危機が共有されたうえで、1) 貧困と不平等、2) ガバナンス、民主主義、社会的包摂、3) 持続可能性と気候変動への危機という 3 つの懸念を、倫理的都市という概念をもって解決への道筋を立てていこうとしている (Barrett, Horne and Fien 2021, p.2)。ここで大切となる視角は、コミュニティから惑星の都市化にどのような解決策を講じることが可能か探究されていることにある。

以下では、バレットたちの倫理的都市論の中身と、同論で何が目指されるのか確認してみることにしよう。バレットたちが目指す倫理的志向のある都市とは、「すべての住民のレジリエンスを高め、生活の質を向上させ、生産的な経済を生み出し、環境負荷を軽減する都市」とされている。そして、持続可能性が漸進的に改善され、すべての人への敬意がはらわれるかたちでのコミュニティへ参加が奨励されている。他方で、倫理的志向のある都市への転換を怠る諸都市への懸念もあわせて示されている。バレットたちは、個人の生活を優先することにこだわり、コミュニティの利益や長期的な繁栄よりも短期的利益を優先してしまい、機能不全で社会的道徳に反する都市に対し、「魅力、持続可能性に欠け、自然や人為的な想定外のショックにより脆弱になってしまう」「メガ・トレンドによって、継続的な破壊に晒される」として警鐘を鳴らす (Barrett, Horne and Fien 2021, p.3)。ここでいうメガ・トレンドとは、COVID-19のようなパンデミックや気候変動などが想定されていると捉えてよい。

こうした倫理的都市論での大前提となっているキータームが、コミュニティである。第3章で検討したルフェーブル (1968=2011) では、コミュニティというワードは登場してはいない。ただ、南後 (2011, p.245) において解説が加えられていたように、ルフェーブルによる「都市の出会いや使用価値を獲得する場」を「個人と個人がつながりうるコミュニティ」に引きつけて考えられていることから、都市生活 (あるいは近い秩序や実践的=感覚的な現実) とコミュニティを似た概念として捉えて差し障りなからう。

倫理的都市論では、都市の中での「個人的な倫理」を中心とするのではなく、「集合的で、コミュニティスケールでの相互作用」が倫理的・道徳的規範を考えるうえで重要視されている (Barrett, Horne and Fien 2021, p.1)。なかでもバレットたちがこだわっているのは、そのコミュニティ観にある。地理学者のホーンが参画する研究プロジェクトの“らしさ”が出ていて、本稿として興味深い部分でもある。すなわち、「倫理的都市のための挑戦には、社会的包摂、共有された価値観、場所の感覚に基づいたコミュニティを再発見することが都市の居住者たちを勇気づける」とされている点である (Barrett, Horne and Fien 2021, p.5)。物理的な場所とは無関係なバーチャルかつ地理的に拘束されない時代において、倫理的都市論のコミュニティ観はややロマンティックなコミュニティ概念に聞こえるかもしれない (p.5) と、バレットたちは自己評価を加えてはいる。しかし、それでもなお、ジグムント・バウマンが指摘したようなイベントやスペ

クタクルと結びつく、個人主義に対抗するだけの伝統的な共同体主義的「コミュニティ」ではないと力説する (p.4)。そのうえでバレットたちは、ブルームの言葉を借りながら、新自由主義による一人一人に責任を負わせる「個人主義的倫理」ではない、コミュニティとしての人びとの関係性の修復と、都市当局との対話による都市生活の積極的な変革が促されている (p.6)。ハーヴェイ (2012=2013, p.43) のいう「新自由主義的倫理」への抵抗が意識されるとともに、ルフェーブル (1968=2011; 1974=2000) のいう都市生活や空間的实践という止揚の基本がおさえられた提案と理解される。

このように、倫理的都市論で意識されるのは「新自由主義的個人主義」からの改善をコミュニティに託そうとしていることにある。「私たち」と「彼ら」というような二分法的な状況を永続させることないという意味で、いかに多様な人たちが関わりを持ちながら権力者と対話を行うか、あるいは行う必要があるか、都市統治のあり方の転換を図ろうとしている (Barrett, Horne and Fien 2020, pp.1-2)。倫理的都市論では、「持続可能な未来と全ての人たちのための経済を実現する型にはまることのないオルタナティブな政治過程が模索され、精緻化されること」が提案されている (p.2)。そのうえで、倫理的都市論をめぐって確認しておく必要があるのは、「設計図」を描かない (p.2) と強調されている点にある。もちろん上述してきたように、倫理的都市においても最小限の目指すべき核心的指針はある。ただ、倫理的都市論では、倫理的規則や行動様式を遵守させるような官僚主義ではなく、都市の諸主体の共通目的と解決策がアーバニズムへの倫理的なアプローチとして大切にされている。そして、個人の権利と集団の責任との適切なバランスの発見、それが他者のための、あるいは他者による権利の実行と、惑星の普遍的な期待と経験を富ませるとの展望に結びついている (Barrett, Horne and Fien 2021, p.2)。ルフェーブル (1968=2011) において懸念が示されていたような「設計図」がたっぷり詰まった虚しいだけの「空虚」な都市からの脱却を、場所的なコミュニティにおいて人びとが「設計図」なくいかに育むかが論点になっていると捉えられる。これが、後述のコミュニティ経済論へと至る通底的接点としてつながっていくのである。

4.2 倫理的都市への権利とジェイコブズの倫理観

さて、倫理的都市論では、倫理的都市への権利という考え方が採用されている (Barrett, Horne and Fien 2021, pp.24-40)。Barrett, Horne and Fien (2021) では、ルフェーブルによる都市空間をめぐる焦点として、

「誰のための権利か」「何のための結果か」「どの都市／ネイバーフッドにおける何のための権利か」その特性への問いが列挙されている。そして、都市への権利の特質が、気候変動と不平等への対応、統治と説明責任をめぐる民主的な形態の構築にかかるあらゆる都市の再編のため、倫理的都市にとって極めて重要と示されている (p.34)。この考察において特徴的なのは、本稿第 2 章で確認したニール・ブレナーたちによる批判的都市理論とも関連づけられていることにある。バレットたちは、**Brenner, Marcuse and Mayer, eds. (2012)** にて論じられている 1968 年の「都市への権利運動の出来事」に触れながら、多様な組織が交差するなか団結する集団的行動の可能性が、企業としてのメディアの強力な権力、「政治的言語」の習慣化などの強力な権力によって、制約されるようになってきていることへの懸念が示されている (Barrett, Horne and Fien 2021, p. 34)。

特に Barrett, Horne and Fien (2021, p.36) では、上流階級の行動と資本の力を「都市再生産」の危機として捉えられている。つまり、先述した「新自由主義的個人主義」の立場も倫理的な介入を示してくるとして、注意を払うことが促されている。そしてバレットたちは、最も懸念されることとして、このような危機が、住民の利益に反して統制の力による都市への権利の組みなおしの好機として捉えられてしまうこと、そして、気候変動や不平等に取り組むためにデザインされた新たな提案が、説明責任と透明性を高めるための率先力の後退につながる。そして、権利、倫理、獲得した基盤を守るための行動と、住民の保護と自由を高めていく行動の両面において、パンデミックであれ、異常気象であれ、経済危機であれ、「このような瞬間は警戒する時」と警鐘が発せられている (p.36)。このバレットたちの警鐘は、ルフェーブル (1968=2011) による都市への権利をめぐる止揚に忠実な理解になっているといえる。すなわち、「新資本主義」的な道徳主義への危機意識である。だからこそ、バレットたちは道徳主義と一線を画する倫理的都市への権利を促すのであろう。ルフェーブル (1968=2011) のいう空間的実践のなかにおける「新資本主義」との止揚も排除せず、弁証法的な対話が Barrett, Horne and Fien (2021) の基盤にあると理解される。

そうしたなか Barrett, Horne and Fien (2021) では、ルフェーブル的弁証法に従いながら冷静に、惑星の都市化への処方箋として倫理的都市への権利が導かれていく。そこでは、どのような“倫理的变化”が都市のレジリエンスを高め、脱炭素化の議論を深め、気候変動への適応をもたらすか (p.9) が問われている。すなわち、集成的

で混成的な都市の盛衰は、技術的、経済的、政治的、社会的、文化的プロセスの力学によって形づくられる複雑性による必然的な結果 (p.9) としたうえで、倫理的都市への権利としての“分岐”が論じられている。都市が直面する実践的な現実——筆者の解釈では、ルフェーブルのいう実践的＝感覚的な現実が想定されていると捉えている——を考慮に入れると、倫理的な枠組みには、かつてのように都市の見せかけの“形”へ誘導して使い古すのではなく、ルフェーブル的都市生活をより善く高めていくために役立つ方向もあるのではないかと問いかけられている。こうした文脈のもとバレットたちは、新たなインフラストラクチャーが、化石燃料を浪費する、富や身分より住民の権利を妨げるなどに伴い、不平等や気候変動を悪化させるのであれば「進歩とはいえない」(Barrett, Horne and Fien 2021, p.9) とときっぱり述べる。そのうえで、住民が積極的、融合的、包括的に動機づけがなされて、われわれがどのように進歩していく必要があるか特徴づけることに、持続可能な応対を試みる倫理的都市の意義を発見しようと呼びかける (p.9)。

ここで気になりはじめるのは、倫理的都市論における“倫理”の意味にある。バレットたちは、倫理の定義をどのようなものとして捉えられているのであろうか。Barrett, Horne and Fien (2021) では、よりよい世界のために絶え間ない探究を行うことが本来的な倫理と位置づけられている。その倫理には、希望、構想、大志、夢の源泉があるとす。こうした倫理がなければ、統治構造に人類を導く羅針盤のようなビジョンが十分になく、心の支えとなるジャイロスコプ的的信念もなく、進歩を評価できる六分儀的な手段が不足していることになるという (pp.3-4)。この文脈においてバレットたちは、経済地理学者のアッシュ・アミン (Amin 2006) による見解を参考にしてている。すなわち、「快楽主義、卑劣で腐敗したアーバニズムの形態を避けて、正義、束縛からの解放、集団的な幸福観に焦点をあわせられるプラグマティズムに向けて導いていく」(Amin 2006 ; Barrett, Horne and Fien 2021, pp.3-4) とする方向性が、バレットたちの倫理観の基層の一つと捉えられるだろう。バレットたちは明言していないが、「設計図」と異なる最小限の指針を求めて、カント、ヘーゲル、デューイへとつながるプラグマティズム (加賀 2013) のような見方を、倫理的都市論に内在させている可能性が想定される。

他方、Barrett, Horne and Fien (2021) では、倫理的都市の起源の探究をめぐり、都市活動家のジェイン・ジェイコブズの倫理観にも接近がみられる (pp.14-15)。倫理的都市論の倫理概念にとって、ジェイコブズ倫理観の

扱いは最大の難所となる。近代とグローバル・ノースにおけるアーバニズムの倫理的特質がジェイコブズの先駆的な仕事に支えられていること (Barrett, Horne and Fien 2021, p.15) を、バレットたちは惑星スケールの多元的な都市論との兼ねあいから葛藤している (pp.15-16)。ただ、ジェイコブズが「都市再生」の負の影響と、都市社会学における社会関係資本の先進的な発想を探究した (p.15) ことを評価している。その評価の中心には、ジェイコブズ (1961=2010) 『アメリカ大都市の死と生』 (以下『死と生』) がある。Barrett, Horne and Fien (2021) では、「ジェイコブズ vs 都市計画家」というご近所コミュニティをめぐる道徳的価値観と倫理的整合性の構図が紹介されている (p.15)。

確かに都市生態系が、都市とその密接な依存物において、任意の時点で活動している「物理・経済・倫理プロセス」で構成されている (ジェイコブズ 1961=2010, p.15) との定義は、バランス感覚に富む (杉山 2020a)。しかし、ジェイコブズ倫理観をめぐる『死と生』を強調的に語り過ぎると、思わぬ落とし穴も待ち受ける。「伝統主義者たちははしだいにジェイン・ジェイコブズの周辺に結集し、モーゼスの大規模事業という野蛮なモダニズムに対して、別種の「都市の美学」でもって対抗しようとした」(ハーヴェイ 2012=2013, pp.35-36) からである。

ロバート・モーゼスとは、1853年にルイ・ボナパルトがパリに派遣して「パリの大改造」を担ったジョルジュ・オスマンが行ったことをニューヨーク大都市圏全体で実行した人物である。モーゼスは、都市形成過程に関する思考のスケールを変え、「大都市圏全体の再開発」を通じて「過剰資本の処理」を実行に移してきた。この過程が、アメリカのすべての主要な大都市中心地で行われて全国規模のものになり、第二次世界大戦後のグローバル資本主義の安定化に決定的な役割を果たしたとされている (ハーヴェイ 2012=2013, pp.31-35)。ハーヴェイ (2012=2013) で論じられたのは、ご近所コミュニティの倫理観が“意図せず”市場と統治の論理に取り込まれてしまう可能性である。その結果、コミュニティが「空虚」な存在へと破壊されてしまい、惑星の都市化が進行してしまう逆説となりかねないのである。これが、ジェイコブズ理論をめぐるバレットたちの葛藤の要因と捉えられる。そうしたなかバレットたちは、倫理的都市論の起源の一つとして遡ることができるプラトン哲学をややネガティブに捉える (Barrett, Horne and Fien 2021, p.15)。実のところ地理学では、演繹的なプラグマティズムの視角をめぐるアリストテレスが「西洋哲学における空間論の鼻祖」(益田 2015) と捉えられており、プラト

ン批判の論調は分かりやすい¹⁶⁾。ただ、ここで議論の俎上にのせる必要があるのは、「空虚」をめぐる逆説を考察するにあたって、『死と生』(ジェイコブズ 1961=2010) だけでは理解し難いことにある。『死と生』から約30年後に記されたジェイコブズ (1992=2016) 『市場の倫理統治の倫理』において、プラトンが基軸となっている説明がつかないのである。Barrett, Horne and Fien (2021) では、ジェイコブズ (1992=2016) への直接的な言及がなく、この点にわずかな「不安」の火種が燻る。

ここは、倫理学の王道からみても「面白い」「倫理学に活かしたい」と評されたプラトンベースのジェイコブズ倫理観について、市場と統治の倫理という「両体系の混合は失敗する」(平尾 2016, p.133) とされている点を冷静に分析しておいたほうがよい。ジェイコブズ理論の見取り図には、『市場の倫理統治の倫理』を軸にして、過剰な統治を批判しているのが『死と生』であり、過剰な市場原理を批判しているのが『壊れゆくアメリカ』(吉永 2016, p.263) という体系がある。そして、市場の倫理と統治の倫理という別体系同士の対話から導き出された「部分的一般化」の先に、『経済の本質』がある (宮崎・玉川 2011, p.141)。すなわち、市場と統治双方の論理のみへ取り込まれない経済のあり方を、プラトンとアリストテレスやカントとの対話から導き出そうとした意味において、ジェイコブズ (1992=2016) の倫理観は倫理的都市論の肝要な論点となる。それは、ウェーバー (1920=1989) が警鐘したような、官僚主義を再生産する「経済倫理」を資本主義に内包させないための過程でもある。

4.3. 倫理的配慮を中心とした経済

本稿としては倫理的都市論を、惑星の都市化への処方箋を考えるための重要な興味深い理論に据えている。ただ一点、その倫理観をめぐる、招かれざる「客」を取り込んでしまう可能性が考えられなくもなく、ささやかながら「不安」もあると述べてきた。こうした「不安」をめぐる一つの解決策を提供してくれているのが、ギブソン＝グラハムたちによるコミュニティ経済論ではなかろうか。上述したような「不安」の回避が示唆されており (山本 2017; 杉山 2020a)、興味深い理論でもある。倫理的都市への権利という惑星の都市化への処方箋の深化に向けた双壁として、以下ではギブソン＝グラハムたちのコミュニティ経済論を検討してみることにしよう。

Gibson-Graham とは、マサチューセッツ大学アムハースト校地球科学学科教授だったジェリー・グラハム (2010年逝去) とウェスタン・シドニー大学の人文地理学教授のキャサリン・ギブソンという2人の経済地理

学者の合同ペンネームである (山本 2017)。2 人はマルクス主義の影響下で学究の道に入ってきている。その経緯は、中澤 (2021) において詳述されている。

ギブソン＝グラハムの関心は、多様な経済とコミュニティ経済という 2 つの経済の関係性にある。そもそも経済とは、私たちの生活を支えているすべての関係であるのに、「経済」と聞くと「賃労働」「営利企業による市場向けの生産」のことが思い浮かべられているという (中澤 2021, p.202)。しかしギブソン＝グラハムたちは、氷山の「海中部分」に目を向けてみよう！と問いかける。そして、資本主義のもとでは周縁的とされてきた社会的企業、NPO、コミュニティ、家族といったさまざまな (組織) 形態が、資本主義的領域よりも広く社会に息づき、より多くの時間を人びとが費やし、より多くの価値を生み出していることに気づかせてくれる。ここでは、「氷山の一角」をどっしりと支える多様な経済が視界に入ってくる (Gibson-Graham 2006a ; 中澤 2021, pp.203-204)。

この多様な経済¹⁷⁾との関連のなかで、コミュニティ経済の話題が登場する。ギブソン＝グラハムが定義するコミュニティ経済とは、一言で表現すれば、倫理的配慮を中心とした経済となる (Gibson-Graham, Cameron and Healy 2013, p.xix ; 杉山 2020a)。ただ、この定義の内情は、複雑かつ難解でもある。というのもギブソン＝グラハムは、「コミュニティ経済」を一種の「空虚」とも呼んでいるからである。「コミュニティ経済は意思決定の倫理的・政治的な空間であって、地理的あるいは社会的な共通項のことではない。またコミュニティは結果であって前提ではない」という (Gibson-Graham 2006b, p.x ; 山本 2017)。———どうということであろうか。

第 3 章でのルフェーブ (1968=2011) の考察結果を踏まえるならば———ルフェーブ理論の検討を経ないと、ギブソン＝グラハムたち特有の真意が理解しづらいかもしれない———、ギブソン＝グラハムのコミュニティ経済論には、「現実」という「空虚」への対抗の意が込められている¹⁸⁾。ギブソン＝グラハムは、コミュニティ経済を地理的な共通性や地域主義の基本的権利———たとえば、場所への愛着、多様性、スモールスケール、協力などオルタナティブな経済———として捉えようとしている。しかし、「一般的な存在」のかたちが与えられている場合があるのもまた「コミュニティ経済」とする。そのかたちは、「決定の倫理的空間としての (経済的) 理想像」と評されている (Gibson-Graham 2006a, pp.86-87)。当然ながらギブソン＝グラハムたちが目指すコミュニティ経済とは、一般的な成長の論理を活発化させる記号的かつ資本主義的な活動、企業の開発的実践、技術的プロ

ジェクトではなく、関係性、つながりをつくる倫理的なプロジェクトの実践にある (Gibson-Graham 2006b, pp.xiv-xv)。すなわち、ギブソン＝グラハムたちの意図は、「設計図」への懸念を徹底して示唆するため、「空虚」という特有の表現を用いたと理解される。この両義性への鋭い指摘は、倫理を経済の文脈で取り扱うことの難しさの表象といってもよからう。

そうしたなか、Gibson-Graham (2006b, pp.xiv-xv) では、政治的空間も内包するコミュニティをめぐり、1) 倫理的プロジェクトを基準とする関係性やつながりと関わるコミュニティの実践と、2) 「設計図 (Blueprint)」と関連づけられた「共同的である (be communal)」との区別の試みがなされている。そして、(本来の) コミュニティ経済の実践のためには、「完璧なコミュニティ経済」という理想像の放棄が求められるとともに、話しあい、闘争、不確実性、葛藤、失望といった実践こそが大切と提起されている (Gibson-Graham 2006b, p.xv)。そうした意味において、コミュニティ経済は〈未だないもの〉 (山本 2017) なのである。(未だないもの) への実践とその生成可能性が講じられるために、氷山の海中部分に存在する経済の多様性を包み込む倫理的配慮を中心とした経済が求められる———。これが、ギブソン＝グラハムによるコミュニティ経済論の核心と理解される。

筆者は、大都市圏経済のプレゼンス強化というグローバル資本主義を内包する矛盾を抱えた「都市再生」「まちづくり」への抵抗に向けて、ギブソン＝グラハムたちのコミュニティ経済論を支柱として育む方向性を議論してきた。そのなかで、ギブソン＝グラハムたちのコミュニティ経済論も結局、「まちづくり」に動員される運命を辿るかもしれない苦悩を呈した (杉山 2020a, p.46)。また、経済地理学者の山本大策 (2020) によれば、日本においては市場経済をベースとしながらも国家による誘導や介入が決定的に重要な役割を果たしてきたため、批評や運動の対象として「産官複合体」が視野に入ってくるという。これが多様な経済論に対して、「内発的發展論」に向けられるものと同様な不満や批判があるとの「不安」であった (山本 2017, p.72)。倫理が話題にのぼる限り、常に「空虚」という「不安」が存在する。ただ、「不安」を抱えながらも、行政からの助成金を利用するなどの関係がはらむ「取り込まれる危険性」への取り込まれない倫理的な行為の喚起 (Gibson-Graham 2006a, p.xxi ; 山本 2017, p.72) がコミュニティ経済論のもう一つの中核でもある (杉山 2020a)。これが、第 3 章以降の懸案事項であった「空虚」と化している「現実」への処方箋として、その「不安」を払拭する道筋となっていくのである。

4.4. コミュニティ経済論とジェイコブズ生態学

そうしたなか惑星の都市化への処方箋を講じる本稿との関連では、Gibson-Graham, Cameron and Healy (2013) での地球レベルの議論が大事になってくる。すなわち、様々に異なる気候、生態系、生息地で構成されている地球という生物圏が直面する脅威に対するレジリエンスへの関心が、ギブソン＝グラハムたちを突き動かす。そこでは、レジリエンスを生み出す経済の要素として多様性が重視されていく。ギブソン＝グラハムによると、われわれが住まうために期待される生き生きとした経済は、(自然とは異なるかもしれないが) 多様性とレジリエンスのタームにおいて自然と類似した関係性を有しているという。そして、環境を使い尽くし労働力を軽視するビジネスは、人びとと場所の脆弱性を増大させると警鐘を鳴らしたうえで、市場経済において役割を果たす企業と同じように、コミュニティの利益に直接的に奉仕する企業や自然環境あるいは社会的環境に配慮する企業によってコミュニティが支えられていると、多様な経済への組み直しが提案されている (Gibson-Graham, Cameron and Healy 2013, pp.191-192)。

上述のようなエコロジカルな研究へと多様な経済論とコミュニティ経済論を発展させたきっかけとして、ギブソン＝グラハムたちは、インスピレーションを得た研究者たちを挙げています。そのうちの一人にジェイン・ジェイコブズが入っている (Gibson-Graham, Cameron and Healy 2013, p.x)。ギブソン＝グラハムたちは、直接的にジェイコブズの研究に触れてはいない。それでもジェイコブズの「生態学的力学」にヒントを得ていることは明示されており (p.x)、(これは筆者の解釈だが) 文脈から『経済の本質』(ジェイコブズ 2000=2001) への接近が想定されていると考えられる。先ほど軽く触れた『経済の本質』は、ジェイコブズの集大成の一冊ともいえる著書である。市場の倫理、統治の倫理との対話のゆくえとして、一つの到達点が『経済の本質』としての自然との接合であった (ジェイコブズ 2000=2001)。論点の多さからその全てを本稿で紹介することは不可能でもある。ここでは、端的に次の3つの論点をコミュニティ経済論との関連で示しておきたい。

1つ目は、「経済と生態系の2つに作用する原則は、同じ」として経済と自然の接近を図ったことにある (ジェイコブズ 2000=2001, p.10)。誤解のないように述べておくと、ジェイコブズは環境決定論を展開していない。むしろ人間が経済を通じて自然に働きかけるプロセスを重視しており、環境可能論と見立てることが妥当だろう。そのうえで、ジェイコブズ特有の表現として「生態系は

エネルギーが通過していく道管」であり、「この道管を通過する間にエネルギーと物質の変換が、回数(の多少)はともかく、起きている」(ジェイコブズ 2000=2001, p.58)との指摘が大切になる。この部分は、複雑系経済学者の塩沢由典 (2016) での解説が分かりやすい。すなわち、ジェイコブズの「道管」という表象は、散逸構造としての経済に極めて近いという。「人間の経済も、大きく見れば、地下資源や空気・水を系内に取り込み、廃棄物を系外に排出する散逸構造」と捉えられている (pp.164-167)。この考え方は、コミュニティ経済論だけにとどまらず、惑星都市理論、倫理的都市論にも通底されてもよい考え方であり、ヒンターランドとの関連で惑星の都市化の経済循環を省察する重要な知見といえる。

2つ目は、地球の分化 (ジェイコブズ 2000=2001, p.21) という文脈において、発展は一系統としてはとらえられなくて相互依存関係にある共発展の網——ジェイコブズはこれをクモの巣型の共発展と表現している——として機能するとされていることにある (p.24)。そして、「経済は相互依存の関係でできており、競争もするし共発展で結びつきもする」としている (p.28)。これは、ネオ内発的発展論との親和性も想定されるものであり、自治体運動論としての「内発的発展」との差異の強調に十分な概念的背景となる (杉山 2020b)。

3つ目は「ピクニック法則」¹⁹⁾についてである。「ピクニック法則に相当する経済原理を考えだすことは現代の政府とその政策助言者がずっと思案してきたこと」として、「ピクニック法則にもとづく処方箋」はきかない (ジェイコブズ 2000=2001, p.60) と断罪している。あわせて、「氷河時代こそ地球にとって常態であり、われわれがいま享受しているような温暖な間氷河期は異常事態」と捉えた文脈において、「経済的悪循環は、補助金を受ける結果として起こることがよくある」との揶揄が示されている (p.124)。これらが、前節での倫理的な行為の喚起 (山本 2017) として受け継がれていると理解される。

Gibson-Graham, Cameron and Healy (2013) における惑星が俯瞰されたコミュニティ経済論では、ジェイコブズのいう「経済の本質 (自然)」が実におさえられている。ジェイコブズ (2000=2001) への理解があつて、惑星の都市化への処方箋としてのコミュニティ経済論が、倫理的都市論とともに定位される。すなわち、惑星の都市化を推し進めてきたグローバル資本主義に対抗するための、経済主義や官僚主義に陥ることのない市場と統治の倫理の対話を通じた空間的実践の生成可能性が、ジェイコブズ的な共発展性の着想により明確になるのである。

5. むすびにかえて

最後に、本稿での論点を整理して、結論と今後の展望を示したい。第一に、惑星都市理論における「資本新世」(渡邊 2021)の見方への問い直しである。惑星都市理論では、フランクフルト学派の批判理論も起点とされていたが、他方でルフューブル (1989=2018) も原点にある。そうしたなカルフェーブル (1968=2011) では、都市計画的思惟批判の内実と向きあい、使用価値を中心とする都市生活の回復が希求されている。すなわち、惑星の都市化へと波及した「空虚」という「現実」からの変化である。そのうえで本稿では、その変化に向けて、空間的実践のなかにおいて倫理をめぐる止揚を講じていくことが、斯学において不足していると指摘した。そして、経済主義に陥ることは避けつつ、他方で単に「資本新世」への疑問を投げげるだけではない、「新自由主義的統治」(ストーパー 2016=2017) という意味での「興業者の」都市計画を弁証法のもと問い直す姿勢が必要と主張した。

第二に、惑星の都市化の主要因の一つとも捉えられる「興業者の」都市計画 (ルフューブル 1968=2011) への処方考をあたって、本稿ではバレットたちによる倫理的都市論の視角を処方箋の一つとして紹介した。Barrett, Horne and Fien (2021) では、社会的包摂、価値観の共有、場所の感覚に基づいたコミュニティの再発見が、官僚主義をこえた統治を考察する倫理的アプローチの基盤とされていた。そして、ルフューブル理論を軸に導き出された倫理的都市への権利 (Barrett, Horne and Fien 2021) を取り戻すことが、惑星の都市化への処方箋として有効と本稿では位置づけた。他方、倫理的都市論において扱われているジェイコブズの倫理観をめぐって、プラトン哲学とアリストテレス哲学との対話 (ジェイコブズ 1992=2016) を承認する方向性も示唆した。

第三に、本稿では、倫理的都市論の重要性を最大限に承認した一方で、その倫理観をめぐり統治の論理に傾斜しすぎないようにフォローするために、コミュニティ経済論の役割があると論じた。コミュニティ経済論は、「空虚」に取り込まれないための倫理的配慮を中心とした経済であった (Gibson-Graham, Cameron and Healy 2013)。すなわち、〈未だないもの〉としてのコミュニティ経済の生成可能性と多様な経済へのアプローチを高める方向性が (山本 2017)、グローバル資本主義に侵食される惑星の都市化への抵抗にあたって大切となる。そして、こうしたギブソン=グラハムたち「らしさ」のある経済研究が、ジェイコブズ (2000=2001) の『経済の本質』と共鳴しあうなかで惑星の都市化への処方箋の双壁として定位されるようになる。

以上の考察を経て本稿としては、気候変動、パンデミック、ジェントリフィケーション、格差拡大など、グローバル資本主義の帰結としての惑星の都市化に起因した「現実」と向きあうために、都市統治のより善きあり方にアプローチする倫理的都市論と、多様な経済への道筋を開くコミュニティ経済論の2つの視角が処方箋として肝要になると結論づけておきたい。ただ、この結論は、刻一刻と危機が深刻化する惑星の「現実」に対峙する一過程でしかない。当該結論を基盤としつつ、惑星の都市化という「現実」の抑制に向けた議論をさらに深耕するため、次の2点を今後の展望として示唆しておく。

一つは、倫理的都市論とコミュニティ経済論双方において登場したジェイコブズ倫理観 (1992=2016 ; 2000=2001) との対峙の仕方を深掘りする方向性である。確かにジェイコブズ理論は、惑星スケールのエコロジカルな視点を保ちつつ、現代の都市 (化) やコミュニティの諸問題を議論するうえで魅力的に映る。一方で、Barrett, Horne and Fien (2021) においてそれとなく示唆されていたように、グローバル・ノースの都市論/コミュニティ論におけるジェイコブズ理論の影響力への葛藤がある。この葛藤は、本稿での中心的話題の一つであった「空虚」(ルフューブル 1968=2011) に取り込まれることへの「不安」(山本 2017) の問題につながっている。すなわち、ジェイコブズ理論の魅力が、扱う者の意図に反して、時に魔力ともなりえる可能性が考えられなくもないからである。それは、第4章の倫理的都市論の検討過程で触れたように、「別種の「都市の美学」でもって対抗しようとした」とするハーヴェイ (2012=2013, p.36) の的確な指摘に凝集されている。確かに惑星都市理論での関心事としてあげられている「資本新世」への問い (渡邊 2021) も大切なのだが、それ以上に「空虚」の原因に直結してきた都市計画的思惟への批判 (ルフューブル 1968=2011) にこだわるのが求められる。そのためにも、ジェイコブズ理論をめぐると二律背反的な「不安」の解消に向けて、ジェイコブズ自身が『市場の倫理 統治の倫理』(1992=2016) で実践していた倫理的対話を重ねていくことが、倫理的都市論とコミュニティ経済論双方にとって一層、必要となっていくであろう。

もう一つは、そうした対話の実践において、ヘーゲル哲学とアリストテレス哲学との対話が鍵を握ると、本稿の考察を経て理解されるところでもある。というのも、ヘーゲル哲学などを背景に持つガブリエル (2020) の倫理資本主義の着想が存在感を増す可能性も予見されるからである。経済地理学においても、資本主義でも社会主義でもないとする議論の流れにおいて、社会連帯経済、

公共空間などの文脈を通じて「倫理的な」資本主義が触れられはじめている（立見・長尾・三浦編, 2021, p.28）。こうしたなか、資本主義の冠の一つとして目されつつある「倫理」に含意される価値観の多様性を、資本主義との関連で扱うことの困難さに直面する可能性もある²⁰。そのなかで、「倫理資本主義の都市論」とでも表現されるような分野が論じられていくかもしれない。その「倫理資本主義の都市論」は、倫理的都市論やコミュニティ経済論と関わりあえるのか、経済主義として相反するのか。もし相反するならば、コミュニティ経済論をめぐる中澤（2021, p.203）が接近するカール・ポランニー（1977=2005）がアリストテレスの考察を踏まえていること²¹、そして、倫理社会主義を把握していたこと（若森 2015, p.244）とどう向きあうか——。惑星の都市化の抑制に向けて、これらの吟味を今後の研究課題としておきたい。

注

- 1) 本稿では、平田・仙波編（2021）を参考にプラネタリー・アーバニゼーション研究のことを「惑星都市理論」にて統一表記する。
- 2) ここでの「都市中心主義」とは、単に田舎や農村との対比において「都市」を中心に議論するというような意味あいではなく、後述するルフェーブル（1968=2011）で論じられている、国家による都市計画や「興業者の」都市計画の担い手を中心となった「都市再生」「都市更新」などのことを指す。
- 3) 弁証法をめぐる最近、ヘーゲルとマルクスの弁証法を分かりやすく解説する牧野（2021）の論考が出された。牧野によると、「矛盾」の重視はヘーゲルやマルクスの弁証法とも一致するとしてうえで、「資本主義の肯定的理解がその否定的理解や必然的没落の理解になるのは、資本主義の矛盾（資本による労働の搾取、富と貧困の矛盾、経済恐慌、階級闘争など）が把握されるから」とされている（p.102）。本稿もこうした理解のもと、弁証法を位置づけてある。
- 4) ルフェーブル（1968=2011）では社会的実践という言葉が使用されているが、本稿では、後年に記されたルフェーブル（1974=2000）の空間的实践という言葉を採用してある。ルフェーブルにとって空間の概念とは、「ひとたび空間と意味作用に満ちた社会的実践に結びつけられると、完全な意味を帯びるようになる」と理解されている（ルフェーブル 1974=2000, p.213）。
- 5) 「時間と空間の経験が変容し、科学的判断と道徳的判断との結びつきへの確信が崩壊することで、社会的関心、知的関心の最も重要な焦点が倫理から美学へと変

わり、イメージが物語を支配し、はかなさと断片化が永遠の真理と統合された政治よりも上位に立つ（ハーヴェイ 1990=1999, p.424）と問題視されている。

- 6) 筆者は、ミルトン・フリードマンによるマネタリズムへの懐疑と対抗、ジェイン・ジェイコブズの「四条件」に基づく反都市計画思想を重視するとともに、早期から地球環境問題に取り組んできた宇沢（2000）の思いには共感している。「現在の世代が、一見高い消費生活を享受するために行っている経済活動によって、大気の均衡が大幅に破壊され、将来の世代が、地球温暖化によって、その実質的生活水準が大きく低下するという結果を招来しつつある」（宇沢 2016, p.226）との警鐘は、先見性に富む示唆でもある。人文地理学者の加藤政洋（2015）が「反都市計画の思想」を鍵に、ルフェーブルやハーヴェイの理論に宇沢経済学を引きつけようと試みたのも頷ける。それでもなお社会的共通資本が「それぞれの分野における職業的専門家によって、専門的知見にもとづき、職業的規律にしたがって管理、運営されるもの」と示されたことと、「社会的共通資本の管理、運営は、フィデュシアーリー原則に基づいて信託されているとされる」（宇沢 2000, pp.22-23）という点が、筆者としてはどうしても引っかかる。
- 7) 岩井（2019）が述べるように、資本主義は「ポンコツ」なのかもしれない（p.38）。そうしたなか「ポンコツ」だからといって資本主義を安易に“廃棄”しない姿勢（pp.66-67）は考慮されてよい。マルクス主義の立場から環境経済学を講じた宮本憲一（2020）もいうように、「資本主義の様相に変化が表れているが、それは新自由主義の危機の表れで、資本主義の否定ではない」（p.21）とする慎重な姿勢が求められる。
- 8) 「鉄の檻」とは、いわば官僚主義が跋扈する状況のことを指している（ウェーバー 1920=1989）。
- 9) マイケル・ストーパーとは、都市論におけるロサンゼルス学派的経済地理学者として斯学で名の通った研究者である。ストーパー（2016=2017）では「都市からの公共セクターの包括的撤退、都市生活の規制緩和、都市公共財の削減、または地域開発を形づくる際の地域間移転の役割の低下について」、世界的な現象として「公共部門の投資、公共財、都市や地域にかかわる事柄における規制の着実な増加」が示唆されている（p.109）。ストーパーは、こうした流れを包括する言葉として「新自由主義的統治」（p.110）を用いている。この用語が用いられる背景には、「統治性」という過程としての新自由主義化（p.115）ということに加えて、「新自由主義に批判的な文献には、不吉な、反自由主

義的、反資本主義的なドラムビートがなっている」(p.122) ことへの警鐘もある。これらの点を前掲注 7)や後掲注 11)との関連で議論することが求められる。

10) 同様の引用著書が続く場合の表記について。本稿では、特定の著者と出版年が何度も続く箇所が多い。何度も繰り返すと読むにあたって冗長になることから、一旦、著者と出版年を示したのちに区切りが付くまでは、頁数のみの表記としてある。杉山 (2020a) が掲載されている『経済地理学年報』での方法に準拠した。

11) 「地球上に存在する多種多様で複雑な生態系のなかにみられる生産/再生産、権力/非権力の構造について、資本(主義)を中心に考察する試みが資本新世」(渡邊 2021, p.94) とされている。ただ、「人類の敵は資本(主義)」(p.94) としてしまうと、対話の相手が不在になりかねない。第 3 章で詳述するルフェーブル (1968=2011) も、空間的実践のなかで「新資本主義」の止揚を試みようとしているからである。

12) ハイデガー (1927=2013) については、地理学においてもしばしば参照されるが、その方向性はやや否定的に捉えられることが多い。たとえば、先述のソジャ (1989=2003) では、空間化された存在論が講じられた際にハイデガーの「存在の空間-時間性」が確認されている (p.179)。ハイデガーとサルトルという「2 人の 20 世紀実存主義現象学者の功績を強調する存在論的闘争が湧き起こるなかで、存在・意識・行動の空間性に対する覚醒が再び起こり、空間的実践の可能性がますます意識されるようになる」(ソジャ 1989=2003, p.180)。ハイデガー (1927=2013) は「現存在が空間的であるというのは、目くばりをとおして現存在が空間を発見するという意味だが、その際も、そのように空間的に立ち現れてくる存在するものを絶えず阻遠しつつそれと関わっている」と述べている (p.160)。これは一見、空間性や場所性を重んじる地理学として興味がそそられるフレーズにみえるが、その次に、現存在が「同時に一定の方向に向かう性格を備えている」こと、そして、「記号」が必要(ハイデガー 1927=2013, p.160) ともされていることに留意が必要なのである。本稿でも幾度か登場しているハーヴェイ (1990=1999) は、地政学とハイデガーの「落とし穴」(p.393) として、ルフェーブルに倣ってネガティブな評価を加える。そして、地理学のなかで人間主義を講じる人文主義地理学のエドワード・レルフ (1976=1999) ですら、「住まいの場所」に対する愛着の喪失は「おそらく本当であろう」としながらも、このようなハイデガーの議論が「極端すぎる」として、

その困難さが強調されている (p.107)。

- 13) ルフェーブルの言う「新資本主義」とは、新自由主義(ハーヴェイ 2012=2013) と捉えて問題なかろう。
- 14) あくまでもルフェーブルは、「権威的」であることへの批判を行っている点に留意されたい。決して、道徳や法規の軽視が提案されているわけではない。
- 15) ルフェーブル (1974=2000) 『空間の生産』の詳細は、南後 (2006) が詳しい。また、大城 (2021) において、カナダ在住の地理学者デレク・グレゴリーの見解を参考に『空間の生産』論が講じられている。
- 16) 斯学におけるアリストテレス哲学の重要な論点は、空間論に加えて、中間性概念や実践概念にある(アリストテレス 2015) と本稿として認識している。
- 17) Gibson-Graham (2006a) では、経済思想家のカール・ポランニーが引用されながら、市場取引の多様性が論じられている (pp.56-57)。
- 18) なお、「空虚」をめぐるのは、カール・ポランニーにも解を求めることが可能かもしれない。ポランニー (1977=2005, p.49) では経済(合理)主義をめぐり、次のような見解が示されている。まず、人間社会には経済合理性以上のものが含まれているが、経済合理性主義は「人間の目的は何であるべきか」との問いに対する答えを「なにももっていない」とする。それにもかかわらず、経済合理性主義は「倫理的で実際的な秩序に関する動機や価値判断を含意する」という。「その秩序は、論理的には抵抗できないし、そうでなくても空虚な、「経済的」であれという勧告の域を超えるものだからであり、「こうして、空虚さがあいまいな哲学臭を帯びた俗語によってカモフラージュされた」とある (p.49)。これは、ルフェーブル (1968=2011) での見解と似た解釈と理解される。
- 19) ジェイコブズ (2000=2001) のいう「ピクニック法則」とは、次のような状況という。「ピクニックのための大勢の人の食事を用意しなければいけないとする。そうするとピクニック・バスケットをもっていく人も大勢になる。運搬係と食事のいる人とがきれいに対応していなければならない。ピクニック法則が経済的に作用すると、仕事にあぶれた人と食事にありつけなかった人とが同時に存在することは起こりえない」(p.60)。要は、補助金をめぐる完璧主義への批判が表現されたジェイコブズ特有の抑喩である。
- 20) この予察的研究として、杉山 (2021) がある。
- 21) ここで期待されるのは、アリストテレス的経済倫理(若森 2015, p.197) との対話にある。

参考文献

- ・荒又美陽 (2021) 都市のリスケージングと排除／包摂の論理——グラン・パリ大都市圏という選択は何を意味するのか——, 平田周・仙波希望編『惑星都市理論』以文社, pp.29-57。
- ・アリストテレス (2015) 『ニコマコス倫理学 (上)』光文社。
- ・岩井克人 (2019) 経済の中に倫理を見出す——資本主義の新しい形と伝統芸能——, 京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター編『資本主義と倫理——分断社会をこえて——』東洋経済新報社, pp.33-68。
- ・ウェーバー, M. 著, 大塚久雄訳 (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 (原著年: 1920)。
- ・宇沢弘文 (2000) 『社会的共通資本』岩波書店。
- ・宇沢弘文 (2016) 『宇沢弘文傑作論文全ファイル 1928-2014』東洋経済新報社。
- ・大澤真幸 (2021) 『新世紀のコミュニズムへ——資本主義の内からの脱出——』NHK 出版。
- ・大城直樹 (2021) グレゴリーのルフェーブル『空間の生産』論, 平田周・仙波希望編『惑星都市理論』以文社, pp.309-332。
- ・加賀裕郎 (2013) プラグマティズム思想史の構築に向けて, 『同志社女子大学現代社会学会現代社会フォーラム』9, pp.51-59。
- ・加藤政洋 (2015) 都市の空間を取り戻すために——宇沢弘文の「都市思想」レキシコン, 『現代思想 (総特集 宇沢弘文——人間のための経済——)』43(4), pp.154-161。
- ・ガブリエル, M. 著, 大野和基訳 (2020) 『世界史の針が巻き戻るとき——「新しい実在論」は世界をどう見ているか——』PHP 研究所。
- ・桑田学 (2017) 人新世と気候工学, 『現代思想』45(22), pp.122-131。
- ・斎藤幸平 (2020) 『人新世の「資本論」』集英社。
- ・ジェイコブズ, J. 著, 香西泰・植木直子訳 (2001) 『経済の本質——自然から学ぶ——』日本経済新聞社 (原著年: 2000)。
- ・ジェイコブズ, J. 著, 山形浩生訳 (2010) 『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会 (原著年: 1961)。
- ・ジェイコブズ, J. 著, 香西泰訳 (2016) 『市場の倫理 統治の倫理』筑摩書房 (原著年: 1992)。
- ・塩沢由典 (2016) 『経済の本質』になにを読み取るか, 塩沢由典・玉川英則・中村仁・細谷祐二・宮崎洋司・山本俊哉編『ジェイン・ジェイコブズの世界 1916-2006』藤原書店, pp.149-176。
- ・杉山武志 (2020a) 大都市圏経済の支柱としてのコミュニティ経済, 『経済地理学年報』66, pp.299-323。
- ・杉山武志 (2020b) 『次世代につなぐコミュニティ論の精神と地理学』学術研究出版。
- ・杉山武志 (2021) 惑星の都市化と「倫理」資本主義——コミュニティ経済論の視角を交えて——, 『日本地域経済学会第33回福島大会報告要旨集』, pp.54-56。
- ・ストーパー, M. 著, 菅野拓訳 (2017) アイデアとしての新自由主義都市, 現実にある新自由主義都市, 『空間・社会・地理思想』20, pp.109-126 (原著年: 2016)。
- ・仙波希望 (2021) それでも惑星都市を彷徨するために, 平田周・仙波希望編『惑星都市理論』以文社, pp.387-401。
- ・ソ ज्या, E. 著, 加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳 (2003) 『ポストモダン地理学——批判的社会理論における空間の位相——』青土社 (原著年: 1989)。
- ・ソ ज्या, E. 著, 加藤政洋訳 (2017) 『第三空間——ポストモダンの空間論的転回—— (新装版)』青土社 (原著年: 1996)。
- ・立見淳哉・長尾謙吉・三浦純一編 (2021) 『社会連帯経済と都市——フランス・リールの挑戦——』ナカニシヤ出版。
- ・長尾謙吉 (2013) 産業地理の現実と経済地理学の視点, 『経済地理学年報』59, pp.438-453。
- ・中澤高志 (2019) 『住まいと仕事の地理学』旬報社。
- ・中澤高志 (2021) 『経済地理学とは何か——批判的立地論入門——』旬報社。
- ・南後由和 (2006) アンリ・ルフェーブル——空間論とその前後——, 加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房, pp.190-209。
- ・南後由和 (2011) 文庫解説, ルフェーブル, H. 著, 森本和夫訳『都市への権利』筑摩書房, pp.226-247。
- ・ハイデガー, M. 著, 高田珠樹訳 (2013) 『存在と時間』作品社 (原著年: 1927)。
- ・ハーヴェイ, D. 著, 吉原直樹監訳・解説 (1999) 『ポストモダニティの条件』青木書店 (原著年: 1990)。
- ・ハーヴェイ, D. 著, 森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳 (2013) 『反乱する都市——資本のアーバナイズーションと都市の再創造——』作品社 (原著年: 2012)。
- ・平尾昌宏 (2016) はじまりのジェイコブズ——『市場の倫理 統治の倫理』を読む——, 塩沢由典・玉川英

- 則・中村仁・細谷祐二・宮崎洋司・山本俊哉編『ジェイン・ジェイコブズの世界 1916-2006』藤原書店, pp.132-148。
- ・平田周・仙波希望編 (2021) 『惑星都市理論』以文社。
 - ・平田周 (2021) プラネタリー・アーバニゼーション研究をひらく, 平田周・仙波希望編 (2021) 『惑星都市理論』以文社, pp.3-25。
 - ・ブレナー, N. 著, 平田周・仙波希望訳 (2018) 都市革命?, 『空間・社会・地理思想』21, pp.115-125 (原著年: 2014)。
 - ・ブレナー, N. 著, 馬渡玲欧訳 (2019) 批判的都市理論とは何か?, 『空間・社会・地理思想』22, pp.163-171 (原著年: 2009)。
 - ・ブレナー, N. 著, 渡邊隼訳 (2021) ヒンターランドの都市化?, 平田周・仙波希望編『惑星都市理論』以文社, pp.59-70 (原著年: 2016)。
 - ・ヘルマン, U. 著, 鈴木直訳 (2020) 『スミス・マルクス・ケインズ——よみがえる危機の処方箋——』みすず書房 (原著年: 2016)。
 - ・ポランニー, K. 著, 玉野井芳郎・栗本慎一郎訳 (2005) 『人間の経済 I ——市場社会の虚構性——』岩波書店 (原著年: 1977)。
 - ・牧野広義 (2021) 科学的社会主義の世界観——マルクス、エンゲルスから学ぶ——, 『経済』308, pp.95-105。
 - ・益田理広 (2015) プラグマティズムに基づく地理学的空間概念の弁別, 『地理学評論』88(4), pp.363-385。
 - ・馬渡玲欧 (2021) 惑星都市理論における「自然の生産」の位相, 平田周・仙波希望編『惑星都市理論』以文社, pp.355-385。
 - ・宮崎洋司・玉川英則 (2011) 『都市の本質とゆくえ——J・ジェイコブズと考える——』鹿島出版会。
 - ・宮本憲一 (2020) 地域経済学とその周辺領域の回顧と展望, 『地域経済学研究』39・40, pp.13-24。
 - ・森裕之 (2021) 大阪の興行的都市政策——堺屋太一と維新政治——, 『世界』945, pp.103-112。
 - ・山本大策 (2017) サービスはグローバル経済化の抵抗拠点になりうるか——「多様な経済」論との関連において——, 『経済地理学年報』63, pp.60-76。
 - ・山本大策 (2020) 生活論と「多様な経済」論の狭間で, 松村和則・前田和司・石岡丈昇編『白いスタジアムと「生活の論理」——スポーツ化する社会への警鐘——』東北大学出版会, pp.25-56。
 - ・吉永明弘 (2016) ジェイコブズの倫理学と都市論の結合——ウォルツァーの理論を通して——, 塩沢由典・玉川英則・中村仁・細谷祐二・宮崎洋司・山本俊哉編『ジェイン・ジェイコブズの世界 1916-2006』藤原書店, pp.262-269。
 - ・ラトゥーシュ, S. 著, 中野佳裕訳 (2020) 『脱成長』白水社 (原著年: 2019)。
 - ・ルフェーブル, H. 著, 斉藤日出治訳 (2000) 『空間の生産』青木書店 (原著年: 1974)。
 - ・ルフェーブル, H. 著, 森本和夫訳 (2011) 『都市への権利』筑摩書房 (原著年: 1968)。
 - ・ルフェーブル, H. 著, 平田周訳 (2018) 地球の変貌, 『空間・社会・地理思想』21, pp.99-101 (原著年: 1989)。
 - ・レルフ, E. 著, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳 (1999) 『場所の現象学——没場所性を越えて——』筑摩書房 (原著年: 1976)。
 - ・若森みどり (2015) 『カール・ポランニーの経済学入門——ポスト新自由主義時代の思想——』平凡社。
 - ・渡邊隼 (2021) 都市への権利・非都市への回路——広範囲の都市化と非都市的なものの概念——, 平田周・仙波希望編『惑星都市理論』以文社, pp.71-100。
 - ・Amin, A. (2006) 'The Good City', *"Urban Studies"*, 43(5-6), pp.1009-1023.
 - ・Barrett, B. F. D., Horne, R. and Fien, J. (2021) *"Ethical Cities"*, Routledge: New York.
 - ・Brenner, N., Marcuse, P. and Mayer, M. eds. (2012) *"Cities for People, Not for Profit: Critical Urban Theory and the Right to the City"*, Routledge: New York.
 - ・Brenner, N. and Schmid, C. (2015) 'Towards a New Epistemology of the Urban?', *"City"*, 19. 2-3, pp.151-182.
 - ・Brenner, N. and Katsikis, N. (2020) 'Operational Landscapes: Hinterlands of the Capitalocene', *"Architectural Design"*, 90(3), pp.22-31.
 - ・Gibson-Graham, J. K. (2006a) *"A Postcapitalist Politics"*, University of Minnesota Press: Minneapolis.
 - ・Gibson-Graham, J. K. (2006b) *"The End of Capitalism (As We Knew It): with New Introduction"*, University of Minnesota Press: Minneapolis.
 - ・Gibson-Graham, J. K., Cameron, J. and Healy, S. (2013) *"Take Back the Economy: An Ethical Guide for Transforming Our Communities"*, University of Minnesota Press: Minneapolis.
- (令和3年11月12日受付)